

# 弘前城かわら版

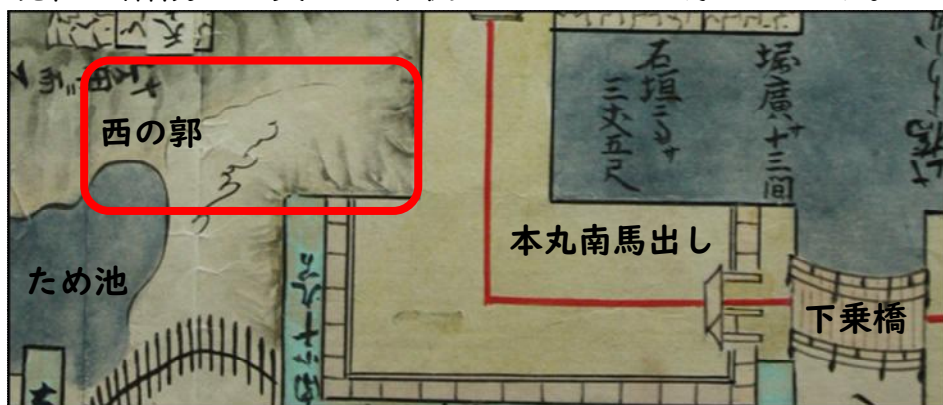
## Vol.10 [令和6年2月19日]

史跡 弘前城跡は、土塁・石垣・濠（ほり）で囲まれた6つの区画で構成されています。この区画は一般的に「郭（くるわ）」と呼ばれ、弘前城跡では各郭において約160年前の「幕末期」を基準とした史跡整備が行われています。今回は郭と郭をつなぐ通路のうち、本丸と西の郭をつなぐ「本丸南馬出し（うまだし）石段」の歴史と整備状況について紹介します。

### 1. 本丸南馬出し石段とは

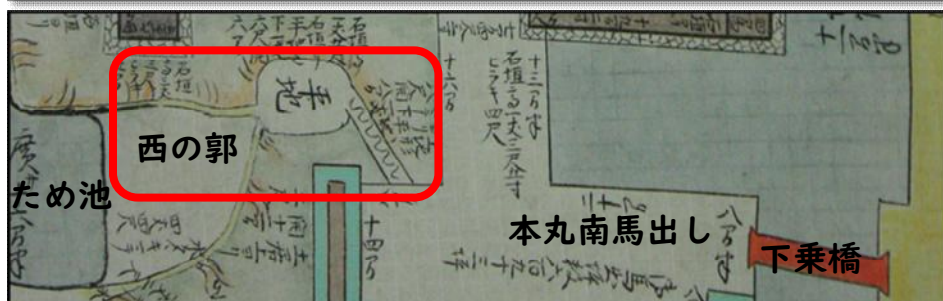
二の丸から下乗橋を渡ると、本丸中心部に続くL字形の連絡路に入りますが、この連絡路を「馬出し」または「武者屯（むしゃだまり）」と言います。城の防御のために設けられた小郭で、合戦の際には大将が軍装を整えて号令を発する場所であったとされ、本丸の南側に当たることから「本丸南馬出し」とも呼ばれています。本丸南馬出しを直進すると、右側に西の郭へ下りるL字形の階段があります。現在、この階段の上段が石段となっていることから、階段全体を指して「本丸南馬出し石段」という呼称が用いられています。

江戸時代の絵図で「本丸南馬出し石段」の部分を見てみると、正保2年（1645）時点ではこの部分に階段や通路は描かれていません【図1】。この部分に通路が表現されるようになるのは寛文12年（1672）以降のことで、元禄11年（1698）の絵図には下部が幅広の「平地」となる通路が描かれており【図2】、現在の階段とは異なる形状だったことが分かります。



【図1】正保2年（1645）  
津軽弘前城之絵図【部分】  
弘前市立博物館蔵

弘前城内の様子を描いた最古の絵図。「本丸南馬出し」と西の郭をつなぐ通路が描かれていないことから、この時点では同所に通路は設けられていなかったものと考えられる。



【図2】元禄11年（1698）  
弘前惣御絵図【部分】  
弘前市立博物館蔵

「本丸南馬出し」と西の郭をつなぐ通路が描かれているが、通路の下部が幅広になっており、「平地」と注記されている。

## 2. 発掘調査と整備

その後、「本丸南馬出し」と西の郭をつなぐ通路については、「弘前藩庁日記（国日記）」の享保21年（1736）4月2日条に「通板」という木材を使った階段と記され、文化2年（1805）の絵図には、現在とほぼ同じ平面形の通路が描かれています【図3】。昭和35年（1960）までには上段を石段・下段をコンクリート階段として整備されましたが、石材の摩耗【写真4・白線内の石材】や老朽化が進んだことから、平成25年（2013）に発掘調査・同29年度に整備工事を実施しました。

発掘調査では、石段およびコンクリート階段の下に3種類の盛土が確認されましたが、各盛土の時期を特定するような遺物は出土せず、史跡整備の基準となる「幕末期」の様相を特定するには至りませんでした。また、石段を構成していた石材の調査では、江戸時代よりも新しい時代のものと思われる矢穴（石を割るために彫られた穴）が多く確認されました【写真5】。大正4年（1915）10月16日の「弘前新聞」に、この部分の整備について「下町へ行く坂道は石の階段と木柵とに依って丁寧に作られて居る」と記述されていることから、確認された矢穴は大正4年のものと考えられます。

平成29年度の整備工事では、上段に可能な限り元の石材を再利用して修理前と同じ形状の石段を整備し【写真6】、下段には岩木山で採取された安山岩と豆砂利舗装を用いて、全体的に史跡景観と調和するように仕上げました。



【図3】文化2年（1805）御城郭分間真図【部分】



【写真4】整備前の石段【平成25年（2013）】



【写真5】石材に残っていた矢穴【黒線でトレース】



【写真6】整備後の石段【平成30年（2018）】